

第二百八十六話 今日の日本苦境(三正面脅威)の元凶はスターリン！

WWIIの唯一の勝利者は、スターリンであるとは、米国支那派遣軍司令官ウェデマイヤー将軍の名言である。戦後の体制をヤルタ体制と云い、1945(S20)年2月の「米・英・ソ」によるヤルタ会談で形作られた。そしてその最大の利益享受者はスターリンのソ連である。



#### 1 ヤルタ会談のテーマ

黒海に面するクリミア半島の保養地で開催されたヤルタ会談の主要なテーマは、

・独の降伏を目指す三国の協力 ・戦後の独対策 ・ポーランドなど東欧諸国問題 ・国際連合の具体案 ・対日戦協力であった。

#### 2 ヤルタ会談の内容(対日参戦に関する秘密協定)

ヤルタ会談の詳細な内容は他に譲り、本項では戦後アジアの地図を大きく塗り替えたソ連の対日参戦に関する秘密協定(1945/2/11)について概述する。日本では独降伏後三か月後に対日参戦するということが特筆されるが、中味はそれ以上に重要な問題を含んでいる。《驚く勿れ、日露戦争まで持ち出すとは日本人とは意識の懸隔極めて大》

- 独降伏後2, 3か月後の対日参戦に合意
  - モンゴルの現状維持 ●1904年の露西亜の旧権利は回復(樺太南部等)
  - 大連港の国際化、ソ連の優先的権利承認、旅順港の租借権回復
  - 南満州鉄道の中ソ共同運営、ソ連の優先的利益保護
  - 千島列島のソ連への引き渡し ●中国への軍事支援、友好同盟条約締結の用意
- 蒋介石支援は反故にし、毛沢東を支援したのは言うまでもない。米国も見捨てた！

#### 3 ヤルタ会談の成果・評価

結果的にみれば、スターリンは虎視眈々と狙っていたもの全てを手に入れたといえる。米英の足元を見て、大幅な譲歩を引き出したスターリンは高笑いした筈だ。

#### 4 スターリンの独り勝ちを何故許したのか？

三つの要因があると考えられる。

##### (1) スターリンの戦略性と米英首脳の見短眼

大戦後の世界を見据えての自国領土や衛星国の拡大や共産主義勢力の扶植を狙っての外交や諸工作の積極的推進

一方、米英首脳は当面の戦争を終結させることを最優先にし、ソ連の真の狙いを見抜けなかった。若しくはソ連の工作に乗せられてしまった。陰謀論が今なお根強い支持を得ているのも頷ける。

##### (2) 特にルーズベルトは、爾後に控えた対日進攻作戦による大規模な犠牲者の見積りに驚愕し、自国兵士の犠牲者軽減のためにソ連軍の対日侵攻作戦を切望(特にマッカーサーの強い働きかけ)しており、その足元をスターリンに見透かされていた。ソ連軍を支援するために、第二百八十話 レンドリース法と非交戦国の参戦に記した様に113億ドルに上る支援を行ったので、軍事的にも自信を持ち始めた。

##### (3) 戦争に疲弊した英国に既に昔日の栄光なく、意思の人チャーチルも精彩を欠き、スターリンに抗し得なかったように思われる。また、ルーズベルトに至っては、健康不安を抱え、病魔に蝕まれ、体力・気力共に落ち込んでいたと考えられ、ヤルタ会談の二か月後に死亡した。正常な判断力を有していたのかと疑問なしとはしない。スターリンとの頓珍漢な会話もあった由。精力絶倫のソ連書記長の独り舞台だったのだ。

#### 5 独裁国家リーダーの強み

戦略の一貫性、有無を言わさぬ強引な推進力、民主主義国家にないものが武器だ。

(了)